

イギリス初等学校の思い出

森 弘子

二女潤子は、四歳四ヶ月から五ヶ月お世話になつたナースリー・スクールの先生のおすすめにより、一九六五年三月中旬、入学許可を求めるべく初等学校（インファントスクール）へ面接にうかがうことになった。

初等学校は煉瓦造り、平屋建で、小学校と簡単な境を隔てて隣接した、堂々と落ち着いたたたずまいであった。

校長先生は白髪の上品な老婦人でさつそく面接して下さり、潤子に名前、年齢、ナースリーの友だちのことなど二、三の質問を、私には家庭状況などを簡単にきかれ、「十分やつていけると思うが、人数の関係もあるので、他の先生方と相談してから通知をさし上げましよう」とのお返事をいただいて帰宅した。

初等学校は五歳入学ときいていたので、年齢的にも二ヶ月ほど

たりず、またこの国の学年始めが九月ということもあり、半ばの期待と半ばのあきらめでいたところ、一週間後、『復活祭の休みあけから入学を許可する』という正式の通知をいただいた。

潤子は親の心配をよそに、姉の学校の隣りの、しかも幼稚園ではないほんものの学校へ行けると大張切り、その日を指折りかぞえて待つた。

中途入学のこととて友だちがあるわけなし、またナースリー初期のような登園拒否に似た状態をくり返すのではないかと不安にかられながら、指定日に登校させたが、担任の七十歳近くかとおみうけするほどのおばあさまの先生がやさしく招じ入れて下さり、潤子はなんの抵抗もなく先生のお手にすがつていった。

帽子かけ、コップかけには特に名前は書かれていず、それぞれ

に違つた絵カードがはつてあり、潤子は大好きなブームが風船

をもつた絵カードの所を使いなさいと教えられ目を輝かせた。

教室はナースリーの四倍もあり、机は大きいのが四つ、一つの机に六人ずつわれるようになつてゐたが、席はぎまつていなかつた。

粘土や積木、ままごと道具などナースリーよりは大分豊富であった。窓ガラスにはかわいいはり紙、前後の黒板にも子どものかきそなはり紙や絵がたくさん飾られていた。

初等学校は五歳から七歳までの三学年で、各学年二クラスずつで編成されていた。そして一、二年のクラスはそれぞれ月齢によつて二クラスに分けられていた。

授業時間は九時から十二時までと一時半から三時半まで、給食

室がせまいので一年生は昼食時に一度帰宅、家庭で昼食をとり、午後再び登校した。登校時にはタオルを入れた袋だけをぶらさげて持つていていた。

一年は送り迎えが義務づけられており、登校の際は隣りの小学校へ通う兄姉のいるものは、保護者なしでもその兄姉と一緒に登校すればよいことになつていて。しかし帰宅時は小学校の方が三十分おそいため、初等学校の子どもたちが校庭で兄姉の終業を待つことは禁じられ、必ず迎えに来るようとに厳命されていた。終

業時間は実にきちんとしており、迎えにおくれたものは即座に注意を受けた。

一年には補助教員が一人ずついておられた。先生は全部で十二、三人いらつしやつたがすべて女性、補助の方をのぞいては年配の方がほとんどであった。

最初の日は物の置場を覚え、友だちに紹介されて帰宅したが、翌日から私は玄関内へは入れなかつたので初等学校の内容については潤子の口からきいた話、時々持ち帰つて来た絵や仕事、帰国直前に許された一日見学と、それに最後にわたされたドリルやノートからその概要をうかがつたにすぎない。

校庭はかなり広く、玄関前はコンクリート、校舎の内側は芝生になつていて了。

ブランコ、シーソー、わくのぼり、砂場などがあり、一隅に手洗も用意されていた。

潤子の話によれば、

○チャイムで休み時間がわかり、休み時間は雨天でないかぎり外で遊ぶことになつていて了。

○体操の時間は体育室で、必ずはだしになつて運動した。

歌やリズム遊びもこの部屋でした。

○きめられたことをきちんと帳面やいただいた紙に書かないとい、

その日の遊び時間は外に出られず、室内で仕事を続けさせられた。

。いうことをきかない子どもは先生がおしりをぶつ板（羽子板のようないもの、駕板とかいて市販されていた）でおしりをたたいた。（男子のいたずらは日本の子どもと比較にならないほど激しいようで、先生もここを超えては許せないというところをはつきりきめて体罰をも辞さない厳しさを持つてのぞんでいられたものと受けとれた）

などで、初めは半紙位の大きさの雑用紙に絵だけ書いたものを持



ち帰っていたが、だんだんと絵の横に単語などを書いてくるようになった。

絵をかいていると先生がまわってみえて、絵の中にあるものの中でやさしそうなものの単語を別の紙に書いて下さり、それを真似て絵の横に書いたのだそうだ。

その後、本を作ったといっておもしろいものを持ち帰って来た。わら半紙半分に折ったのを五、六枚先生がさつと糸でとじて下されたもので、中には絵や単語、時には簡単な文が書いてあり、こんなことができるようになったかとうれしく思った。これは何日かかけて完成したようだ。

また、あき箱やあきびんを使っての工作も盛んで、いろいろ持ち帰った。

日本にいればやっとその四月から二年保育になる年齢なのに、時間が長すぎるような気もしたし、また内容もやや高度で、過労になるのではないかと気になっていたが、本人は少しも苦にせず、毎日元気に通学した。

行き帰りを共にする友だちもでき、登下校時、交通整理をして下さるやさしそうな年老いた守衛さんとも仲良しになり、挨拶をかわし、道々、かけっこやスキップをしたり、なにやらべらべらおしゃべりもするようになり、いつの間にかきちんと歩いて帰ら

せるのに苦労するほどになった。よくここまでことばを覚え、友だちにもとけこめたものと、子どもの順応の早さに驚かされた。

潤子の発音がイギリス人並であったのは、イギリス人の子どもと一緒に、一年生の時に字を書くよりも先ぎに正しい発音をきびしく、繰り返し繰り返し教えられたためだらうと思われ、よい時に恵まれたものと感謝した。

七月には学年末の行事として、音楽会が体育室で行われ、私共も招待された。各クラス順番に歌と合奏をきかせてくれたが、そのじょうずへたよりも、むしろ聞く時の態度のよいのに感心させられた。演奏中、声をたてたり、ガタガタすることは禁じられ、約束の守れない子どもに對してはどのクラスにかわらず、気のついた先生が容しやなく注意を与えた。(間あいは長目で、その間は自由に振舞えた)

夏休みは二ヶ月たっぷりあった。宿題は何一つなく、短い夏を戸外で思いきり遊ばせた。九月は新年度、潤子は一学年を三ヶ月足らずしか経験していないのでもう一回一年生のくりかえしとばかり思っていたが、同級の友だちと一緒に二年に進級させて下さった。潤子の喜びはひとしおだった。教室も先生も変わり、机も一人ずつとなり、二つずつ並んで一部屋に横に三列、たてに五列、人数は一組約三十人になった。

先生は大柄な白髪の方、六十歳位とおみうけした。

学年の決定は日本よりも幅をもつていて、年齢はあくまでも一つの目やすであり、個人の能力を重んじているように感じられた。

日本でこののようなシステムを採用した場合、目の色が変わる親が多いと思うが、イギリスでは親の面では自分の子、他人の子といいう区別なく注意する親は多くみかけたが、進級についてとやかくいう親は一人としていなかつた。親しくした二、三の母親の意見は、力相応の教育を受けることがその子の幸せに通じるという單純明快なものであった。

二年になつて教科書を使うようになつたが、家に持ち帰ることはなく、時間の初めに二人に一冊ずつ配られ、終了時に返納したようだ。

ドリル、ノートも一日の量にきまりがあり、終わつた子どもは先生にお預けすることになつていただらしい。

二年になつてもタオルを入れた袋だけをもつて登校した。テストが返ってくることもなく、あき箱や木くず、王冠利用の工作、絵の具を使っての絵、指絵、クレオソン画を時に持ち帰るぐらいで、一年の時とあまり変化がないようにも思われた。ただ、字に親しむことが多くなりはじめたためか、二年になつて急に知識欲

旺盛になり、本を大変読みたがった。家の近所に子ども図書館があり、週二冊ずつの限度で借りられたのでこれを十分利用させていただいた。

帰国直前、ドリルをかえしていただいたて、毎日必ず一、二枚のドリルを義務づけられてやつていたこと、国語（英語）の教科書も一冊を終え、二冊目に入つていたこと、算数もたし算、引き算の計算を数字や記号を使ってやついたことなどがわかつた。

ドリルは日本の小学校一年生のものはやさしく、同じことが何回も型を少しがえてくり返され、その中で基礎をしっかりと覚えて行く仕組になつており、年齢相応でなかなかよいと思つた。色をぬつたり、絵を書いたりすることも多く、楽しみながら勉強できるといったものであつた。

初級学校の一年生は授業時間と休み時間の区別があるものの、内容はほとんど日本の幼稚園と同じ。二年生は日本の小学校一年生の課程をもう少しがみてくださいて教えたようなものではないかと想像する。一日見学を許されて潤子の教室を訪ねたが、黒板半分に大きくアルファベットが大文字、小文字とならんと書かれ、その横にAならAを使った単語と絵が書いてあつた。（この単語と絵は一週間に一べんかわっていたらしい）そして同じ二年でも月齢の大きい組は内容がやや高度のようを感じられた。

三年になると時間割もはつきりし、小学校への進級学年としてふさわしいような授業内容にかわっていることがうかがわれた。

たつた一年のケンブリッジ生活であつたが、ナースリー、初等学校の生活を通して、潤子は、筋の通つた、教育に一生を打ち込んだような先生方何人にも接し、多くの友だちにも恵まれ、私も先生方やお母様方と接する機会ができ友人の家庭にもしばしば招かれて家庭教育をつぶさにみることができた。

教師のあり方についても、わが家の家庭教育においても大いに反省させられると共に、よき糧となつたことをいまだに深く感謝している。

